

木原二郎著

解説

成身阿闍梨母集

木原二郎

成尋阿闍梨母集

延久三年正月卅日

延久三年正月卅日

延久三年一〇七一年
後三条天皇の代。この
日、作者は岩倉から仁
和寺に移った。仁和寺
仁和寺―京都市右京区
花園町御室にある。真
言宗御室派の大本山。
光孝天皇が山城国葛野
郡小松郷大内山の麓に
創建御成、宇多天皇
御完成、世に御室御
所と称す。

なくなく―自分の泣く
と、驚の鳴くを驚く
申文―願の趣旨を書き
目上の方に奏上する文
よろづ代―下の千代と
合せて千の意を表す。

もしきの―宮の枕詞
ここでは主上を示す。
年八十一―母は延久三
年に八十三才。三河入
道寂照が長保五年に入
宋の折、母が十五であ
ったことがこの集の中
に見える。(二巻25頁)

郎氏は―かしはし―
とされたはし―の誤写か
草子氏は―がしはし―
と解され、それが従う
望の持律の師範、徳
僧都に次ぐ僧官、五位
に準じた。

阿闍梨―師範たるべき
高僧の稱。密教の秘法
伝授の師をい、また
天台・真言の僧の学位
長白殿―藤原頼通、道
等院を建てて隠棲した
宇治殿―宇治の平等院
頼通が冷泉天皇の永
承七年(一〇五二)三月
二十八日、左大臣の

仁和寺にわたりて、思ひ乱るる南おもてに、梅の花いみじう咲きたるに、驚のなきしかば、

① なくなくもあはれなるかなえだえだにこつたふ春の驚の声なほ申し文にて、内にも参らせまほしう。

② 雲の上ぞのどけかるべきよろづ代に千代かさねますもしきの君

はかなくて過ぎはべりにける年月のことども、をかしうも、あやしきも、かず知らず積りはべりにけれど、それをしるしおきて、人の見るべきことにもはべらぬを、年八十になりて、世にたぐひなきことのはべれば、心ひとつに見はべるが、しばし書きつけて見はべらまほしうて。

子は二人ぞ。律師、阿闍梨にて、心ばへよりはじめ、めでたく、たぐひあらじと覚えて物し給ふ。朝夕に嬉しきことにて、年月あつかはれ過ぐしてはべるに、阿闍梨、世の中にいたく仕へ、修法なども、ここかしこ、ひまなくしつつ、苦しき折々は、ともすれば、「心のどかに行ひなどしてはべらばや」と言ひわたり給ふに、世の中めでたく、世を久しく保たせ給ひつる関白殿、年いたうつもらせ給ひて、宇治殿とめでたき堂、極楽などのあらんやうにして、籠りゐさせ給ひて、行幸せさせ給ひ、めでたきことどもして御覧じ、おもしろく聞ゆること限りなし。さて暫しありて、宇治殿なやませ給ふに、老いさせ給ふけにこそはと人々思ひ

仁和寺に移って、悲しみに思い乱れていると、部屋の南側の庭に、梅の花がたいそう美しく咲いている、そこで驚までないでいるので、

① 悲しがつて泣いていても、枝から枝に飛び移ってない驚の声はやっぱり趣深く聞かれることだ。さらに申し文で、宮中へも差し上げたく。

② 無限の年数をお重ねになる主上は、宮中で、心のどかにお過ごしのことごさいますよう。

はかなく過ぎ去ってしまった年月の事柄のなかに、興味あることも、変ったことも、数知れず積み重なってまいりましたが、それを書きとめて置いて、誰が見るというわけのものでもありませんが、年が八十にもなつて、世にもたぐひのないことがありましたので、自分一人の経験したことはありませんが、しばらく書きつけて見たくなりまして。

私の子供は二人です。律師と阿闍梨で、二人とも、気だてをはじめとして、何もかもが立派で、世間の人達からは、世にたぐひのない人物のように思われていられました。私は、朝夕嬉しきことに思いながら、長年世話になって過して来たのですが、阿闍梨は、世間のためにたいそう力をつくして、加持祈禱など、あちこちと、ひまなくつとめて、疲れて苦しい折々は、ともすると、「心静かに仏道修行などをしていたいものです」と言い続けておられたが、当時榮華をきわめ、天下を長く治めておいでになった関白殿が、たいそうお年をお召になつて、宇治殿という立派なお堂を、まるで極楽にでもあるかのものようにお造りになつて、そこにこもつておいでになり、天皇も行幸なさつて、結構なかずのお遊びを催して御覧になり、世間では、そのことについていろいろ面白く取沙汰していることが多い。そのようにしてしばらくたち、宇治殿が病氣になられたが、ご老齢ゆえと人々が思つ

折に、父道長から譲られた別荘を改めたもの、頼通が平等院に移ったのは治暦三年のこと。その時、年七十六。行幸、後冷泉天皇が平等院に行幸なさったのは、治暦三年十月五日。扶桑略記治暦三年十月の条に「五日庚戌、天皇車駕幸臨宇治平等院」同「七日壬子還御」みかど例ならず扶桑略記治暦三年の条に「十二月十二日、廿二社奉幣、依聖体不予也」とあり、治暦四年の条には「二月以後、聖体御修法とし」「御修法とて」の誤か。おほかそうの「おほかたよの」の誤か。仁和寺の宮、性信法親王、三条天皇の第四皇子で、師明親王と申す。後出家して仁和寺の第二世となり、大御室と称せらる。うせさせ給ひぬ、扶桑略記治暦四年四月の条に「十九日庚申、寅刻天皇於高陽院中殿崩年卅四矣」とあり。岩倉、現在の京都市左京区岸上蔵町。そこの大雲寺に成尋阿闍梨が住んでいた。二年、治暦四年と翌延久元年。ふさしくたる「ふさしていたる」の誤か。参天台五台山記第一、延久四年三月十九日の条に「五箇年間不臥為動」とあり、成尋は臥坐したままで臥床せざる行をしてたことと知られる。藤田徳太郎、島津草子氏の説に

たるに、みかど例ならずおはしますと聞ゆ。阿闍梨は宇治殿へ参りなどし給ふに、また内の御修法とし、道をなかにてありき、おほかそうのいとまなく、騒がしくて過ぐるほどに、いとほしう苦しげに、そこらの御修法、仁和寺の宮と申すも参らせ給へるに、宇治殿「よき人あまたさぶらひ給ふほどに、暫し」と召せば、参り給ひぬる。日頃のほどに、みかどいたくなやませ給ひて、騒ぐと聞くほどに、「うせさせ給ひぬ」と人々言ふ。夢のやうにあはれにはべりしものかな。宇治殿はおこたらせ給ひてとて、宇治殿より阿闍梨帰り給ひて、「あさましう夢のやうにもはべる世かな。限りなき御身にも、世のはかなさは、かくこそは」とて、年頃よりもなつかしう召使はせ給へることの思ひいではべるも、いとこそあはれに、ともすれば申しいでつつ過ぐし給ふ。

四月にみかどうせさせ給ひて、七月のついたちの日、岩倉に入りぬ。「そこに入りて念仏もせよかし」とあれば、喜びて入りて、近き所にて見かよはして、思ふさまにてはべる。

本に本と

二年ばかりありて、のどやかに物語しつつ、「このふさしくゐたる行ひ三年果てて、唐に五台山といふ所に、文珠のおはしましける跡の、ゆかしくをがままほしくはべるを、年頃宿曜にいひたることの必ずかなふを、『六十一一つしむべし』といひたるを、若くはべりしより思ひしことは、のどかに行ひして、人騒がしからざらん所にあらんと思ひしを、今までかくてはべりつるを、年本ま、おいり、同じくは死なぬさきに思ふことせまほしきを、唐に五台山といふ所に、文珠の御跡をだにをがみて、もし生きたらば帰りまでこむ。うせなば、必ず極楽をあひ見、をがみ奉るべきことを思はむ」とのたまふに、さはまことに思ひ立ち給ふことにこそと

ていますと、一方ではまた、後冷泉帝が御病氣でいらせられるということであつた。阿闍梨は、宇治殿へ参つたりなどしていられたが、また宮中のご祈禱のために、宇治と宮中との間を往復し、ほとんど休むひまもなく忙しく過ごしておられるので、その苦しげなのが気の毒に思われたが、かずかずの加持祈禱のために、仁和寺の宮と申す方も、宮中に参られましたので、宇治殿が、「宮中には立派な験者たちがたくさんおいでになるのだから、ちよつと」とお召しになるので、阿闍梨はまた宇治殿へ参られた。その留守をしていた数日の間に、後冷泉帝がたいそう御重態になられて、大さわぎをしていると聞いているうちに、「崩御なされた」と人々が言う。本当に夢のように悲しいことであつた。宇治殿は病が快方に向かわれたというので、宇治殿から阿闍梨が帰つて来られて、「悲しい夢のような世の中ですね。主上のような尊いおん身にも、世のはかなさは変りがないのですから」と言つて、阿闍梨は、以前よりも、近頃ひとしおやさしく召し使つて下さつたことなどを思い出されるのも、たいそう感慨深いらしくて、何かといへば、言い出しては過ごしておられる。

四月に後冷泉帝がおかれになつて、七月の一日の日、岩倉に引き込んだ。阿闍梨が、「お母さんも岩倉に来て、念仏でもしなさい」と言われたので、喜んで岩倉に引こんで、近所に住んでお互に行き来し、満足して日を送つた。

それから二年ほどして、ある日、のどかに話をしていたついでに、阿闍梨が「今まで精進して来た三年の仏道修行がすんだら、唐の五台山という所にある、文殊菩薩のおいでになつた旧跡を、行つて見、拝みたいと思つていのですが、実は、今まで、宿曜道という判断は必ずず的中しており、『六十一歳は用心すべし』といわれていますが、私は若い頃からの宿望として、心静かに仏道修行をし、閑静な場所に住みたいと思つていましたが、それもできずに、今までこうして過して来てしまいましたが、年取つた現在となつては、できることなら、死ぬ前に宿望をはたしたいと思ひますので、せめて唐の五台山という所の、文殊菩薩の旧跡なりとも拝んで、もし生きていたなら帰つて来ましよう。死んだなら必ず極楽で相会し、お姿を拝することを急じています」とおっしゃるので、それでは本当に入宋を決心なさつたのだなと、阿闍梨

うちの誰かを指すのであろう。(永井義憲氏) 説) しくはかるべし—想像がつくでしよう。読者が同情を求めるとき、文に「人の見るべきところ」は「集中」にあるが、集中には、このように読者に訴へて、同情を求めるとき、他にも数カ所見られる。(29頁) 人はあはれ知り給はんしあはれ知るとも思へかし。29頁) 少人もあはれなりと思はん人はたなりと思ふと思ふべきなり。29頁) 人、これを見てあらんべからんことをとぶらふべきなり。仁和寺の律師—仁和寺の律師で、成尋の兄。法橋また阿闍梨—誰か不明。律師や阿闍梨の知人であろう。法橋は僧位の—五位に準ず。正月つごもりの日—延久三年正月卅日。給ふに—「給ふるに」の誤。死に入りたるやにて—「死に入りたるやにて—」。「う」を略した表記。母の慣用表記法ある—ひき連れる、伴うの意の「率たる」である。母の傍にいた人、和寺まで送り届け、た人と解する方が、この場合自然であろう。しのべども—この歌、千載集七離別に「成尋法師入唐し侍りける時法師母」と題して入る。

「車めて来たるを、なほ近くて、出で立ち給はんも聞かん。今日はこの車かへしてん」と聞え給ふに、驚きておはして、「なほ今日わたり給へ。日つきも悪しければ」とて、このんまごの禪師とんして、おこし立てて、われも立ち添ひておはする。顔をだに見むと思へど、涙に霧りわたりて、息のあるかぎり泣かまほしけれど、年ごろ、物も高く言ひて聞かせぬ僧どものなみたる折しも、悲しきことといひながら、いまさらに、さま悪しき声も聞かせじ、ただわれうせて別れぬるなり、阿弥陀仏に救ひ給へと念じて、車にかき乗せらるるほどの心地、おしはかるべし。死に入りたるやにてこそはありしか。ゐたる人に、「奉れ」とて取らせおきし。

⑧ しのべどもこの別れ路を思ふにはからくれなゐの涙こそ降れし
④ しばしぞと待つほどもなき命にはこの世のかりの別れ路ぞ憂き

⑤ 道芝に捨ておかれぬる露の身はちすの上もいかかとぞ思ふ

⑥ 敷島を漕ぎはなるともゆく末にこまほしくなる心つけなん

⑦ もろこしも天の下にぞありと聞くこの日の本は忘れざらん

「自分がまだここににいるうちに、母を迎えに来て下さい」と、阿闍梨から律師に言つてやられたのでしよう。正月三十日の日に、仁和寺より車をよこして、迎えに来られた。そこで私は阿闍梨のところへ、「仁和寺から迎えの車をよこされましたが、やはり私はあなたのおそば近くについて、ご出立のようすも聞きたいと思ひますので、今日はこの車を返したいと思ひます」と言つてやると、阿闍梨は驚いてやつて来られて、「やはり今日仁和寺にお移り下さい。今日でないよそに移るのには日どりもよくないことですから」と言つて、孫の禪師たちにも言いつけて、私を励まし立て、自分もそばに付き添つておいでになる。私は、せめて阿闍梨の顔なりとよく見たいと思つたが、涙に目もかすんで見ることもできず、また、息の続かきり泣きたいと思つたが、それも、今まで高い声で物を言うのも聞かせたことのない僧たちが大勢並んでいゝこんな折に、いくら悲しいことだからといって、いまさらはしたくない泣声など聞かせたくないと、じつと我慢しなければならぬ。ただ、こんなことなら自分が死んだ後で阿闍梨に別れるのであった、阿弥陀さまどうかこんな私をお救い下さいと念じて、追いつたてられるようにして車に乗せられた時の私のせつない気持は、どなたにも想像がおつきになることでしょう。ほんとうに死んでしまったような気持でした。それで、自分を連れて来た人に、「あとで阿闍梨に差し上げて下さい」と言つて、次のような歌を渡して置いた。

⑧ いくら我慢しようと思つても、最愛のわが子との別れを思うと、紅の涙の降るようにあふれるのをとめることはできない。
④ しばらくの別れだと思つて、阿闍梨の帰朝するまで待つていたい、その僅かの期間も待つていられそうもない私の命なので、私にはこの世の最初の別れが何よりもつらい。
⑤ 阿闍梨が渡宋して、路傍の芝に置かれた露の捨てて顧みられぬように、ただ一人あとに残された私には、極楽往生もできるかどうかあやふまれる。
⑥ たとえ一度はこの日本を去つても、将来また日本に帰つて来たいと思う心を起させたいものだ。
⑦ あの遠い唐土もこの日本と同じ天空の下にあると聞いている。だから、どうかこの日本のことを忘れないでいて欲しい。

「この」に「子の」をかける。「からくれなゐ」には「唐土」の意をこめられてゐる。こまほしく「高麗」をもひびかす。新古今集九別離に「成尋法師入唐し侍りける」と題し、四句「照る日の本を」として入る。天のあやを含めた歌の岸に「この歌、夫木抄卅四雜十六釈教に成尋法師入唐の時に入る。一かの岸」は、死後の救いの彼岸を、かの唐土の岸にたとへ、彼岸に救われる仏法の船を、成尋の船が無事に早く唐土に到着して帰って来ることにたとえた。くるま「来る間」に「車」をかける。火宅をのがれる車で、法華経長者喩子品に出てゐる故事による。こしらふ「なだめる、なぐさめる、さとす」。「車に乗って仁和寺にお移りなさい。私はすぐ宋から帰って来ますけれども、それでも私は、やはり諦めきれない」との意。日をめぐりてや一日、めぐり、出づる、入るは縁語。あふみ「近江」に「逢ふ」をかける。そこ「底」に「其処」をかけた。そのあした「仁和寺に移った翌朝。二月一日「すきてみす」(宮)「すきてみす」(冷)

⑧ かの岸にほだなくこそは行きてこめ心にかなふ法のいかだは
⑨ くるまぞとこしらふれども火の宅に惑ふ心はやまずぞありける
仁和寺へまかるぞ、と書きて、

⑩ 歎きつつ日をめぐりてや過ぐしてん出づるも入るもみ山べの里
⑪ 惜しみわびねのみ泣かるる別れ路は涙もえこそとどめざりけれ
⑫ 別れ路を慕ふ心はもろともにいきてやわれもあらんとすらん
⑬ 行くかたの近きあふみの海ならば恋しき影はそこに見てまし

そのあした、文おこせ給へる。つらけれど、いそぎ見れば、
「夜のほど何ごとか。きのふの御文見て、よもすがら涙もとまらずはべりつる」とあり。見るに、文字もたしかに見えず、涙のひまもなくすぎて見ず。からうじておきあがりて見れば、仁和寺の前に、梅の木にこぼるばかり咲きたり。あるところなど、みなしおかれたり。心もなきやうにて、いづかた西なども覚えず、目も霧りわたり、夢の心地して暮したるまたのあした、京より人来て、「今宵の夜中ばかり出で給ひぬ」といふ。おきあがられて、いはんかたなく悲し。

またのあしたに文あり。目も見あけられねど、見れば、「参らんと思ひはべれど、夜中ばかりにまで来つれば、かへすがへす静心なく」とあり。目もくれて、心地もまどふやなるに、送りの人々あつまりて慰むるに、ゆゆしう覚ゆ。やがて八幡と申す所まで船に乗り給ひぬと聞くにも、おぼつかないふかたなし。

⑧ 思い通りになる仏法の船同様に、阿闍梨の船も唐土について、やがて間もなく帰ってくるのだらう。
⑨ 悲しみも私が帰ってくるまでの、ほんのしばらくの間だけだと、阿闍梨は慰めてくれるが、現世の煩惱にとらわれている私の心は、いつまでも惑ってやまない。

「では、今から仁和寺へ参ります」と書いて、
⑩ 仁和寺の山里を、出るにつけ入るにつけ、私はこれからの年月を嘆き悲しんで過して行くことでしょう。
⑪ 別れを悲しんで、声をあげて泣いてばかりいるので、行く人を止めることもできず、また、涙もとめることはできない。
⑫ 別れを惜しんであとを慕う心は、体をはなれて、自分もいっしょに行こうとするのであろうか。

⑬ 阿闍梨の行く所が、近い(その名もあうという近江の湖)なら、恋しい面影をそこ(底)に見ることもできようが。

仁和寺へ移った翌朝、阿闍梨が手紙をよこされた。つらい気持ちながら、急いで開いて見ると、「昨晩はいかがでしたか。私は昨日のお母様のお歌を拝見して、一晩中涙もとまりませんでした」とある。それを見ると、涙に眼も曇って、文字もはつきりとは見えず、涙はとめどもなく流れて、時が経ってしまう。やっと起き上って見れば、仁和寺の前に、梅の木に、こぼれるほどに花が咲いていた。私の住む部屋など、すっかり準備されている。しかし別れの悲しさに茫然として、どちらが西の方角やらもわからず、目の前がぼううつとして、夢のような心地で一日を過ごしたその翌朝、京から使の者が来て、「昨晩の夜中頃に阿闍梨は出発なさいました」と告げた。私は起き上がることもできず、何ともいえない悲しさであった。

その翌朝、また阿闍梨から手紙があった。私は眼もあけられないほどであったが、しいて開いて見ると、「お暇乞に参上しようと思いましたが、夜中頃に出発しましたので、失礼しましたが、しかし、かえすがえすも気がかりです」とある。涙で眼もくらみ、気も転倒したような状態だったので、阿闍梨を見送った人々が、集まって慰めてくれるけれども、それさえも忌まわしいように感じて、悲しさはどうにもならない。やがて「八幡という所から船にお乗りになった」と聞くにつけても、頼りなさは言いよ

こぼるばかり―「こぼるばかり」の誤か。本ママ落歟。まどふやなるに(宮)―「まどふやなるに」(命)迷ふやう。「う」を略した表記法。送りの人々―阿闍梨を送りに行った人々。八幡―京都府綴喜郡にあり、昔西国に行く人は車で八幡まで来て、そこから舟に乗って淀川を下った。所まで―「所にて」の誤か。あさり(宮)―「あま(令)生」の松原―筑前国(福岡県)早良郡老岐村の海岸にある。竈門山―宝満山ともい、筑前国の筑紫郡と嘉穂郡とにまたがる、現福岡県太宰府町附近にある山。竈門神社がある。うら―「浦」と「恨」とをかけた。かの岸を―この歌、脱落ありて歌意不明。こじま―児島の「児」と、わが子の「子」とを掛ける。帰らんず―「んず」は意志の助動詞。帰って来よう。みるめ―「見る目」と「海松布」とをかく。なぎさ―「渚」と「無き」とをかける。蟹―「海女」と「尼」との掛詞。なぎさ、あまは縁語。宮阿闍梨―宮田氏、藤田氏は、仁和寺の性信法親王とされるが、島津氏は「天王寺別当宮の阿闍梨と同一人である。

⑭ ふなでする淀のみ神も浅からぬ心を汲みてまもりやらなん

と泣く泣く覚ゆる。あさましう見じと思ひ給ひける心かな、あさましうと、心憂きことのみ思ひ過ぐししかば、またこの人のまこととにせんと思ひ給はんことたがへじなど、思ひしことのあさりに従ひて、かかることも、いみじげに泣き妨げずなりにし、この日ごろのすぐるままにくやしく、手をひかへても、ゐてぞあるべかりけると、くやしく、涙のみ目に満ちて、物も見えねば、

⑮ しひて行く船路を惜しむ別れ路に涙もえこそとどめざりけれ
筑紫には、生の松原ありと聞きて、

⑯ おとに聞く生の松原名にしおはばゆきかふ人もよろづ代ぞ経ん
竈門山といふところもあんなれば、

⑰ 思ひやる心を知らばかまど山はるけき道も照りぞわたらん

人々、「津の国といふところにおはしぬらん」といへば、

⑱ 芦間行く船もさはらず漕ぎでぬと聞けば難波のうらめしきかな
天を眺むるに、青く見えわたれば、

⑲ かの岸を思ひやりてぞあを(本に心えずと)このかたをながむる

三四日ありて、「今は備前の児島などにや」といへば、

⑳ そのかたに漕ぎ行く船のわれならばかれはこじまと慰めてまし
「必ず帰らんず。そのほど生き給へ」とありし、思ひいでられて、

うがない。

⑭ 阿闍梨が船出するのですから、淀の神様も、私の深く悲しんでいる心中をお察し下さって、どうか阿闍梨をお守り下さい。と、泣きながら心に思った。よくもまあ私にあわないで出発しようとうと決心なされたことだ、その心の嘆かわしいことよと、せつないことばかり考えて過す。また、あの人が、本気に決行しようと思ひ立たれた志にそむくまいなどと思つたために、阿闍梨の考えに服従してしまつて、入宋のことも、大げさに泣いてとめるというこどもなしに終つたことが、あれから日のたつにつれて残念で、手をつかまえてでも引きとめて置くべきであつたと、後悔され、涙ばかりが目についた。阿闍梨は強い船出をしたが、私はその別れを惜しんで、涙をせきとめることができず、涙もまたその船出をとどめることはできない。

筑紫には生の松原という所があると聞いて、

⑮ 噂に聞いている生の松原が、本当に名の通りなら、入宋する阿闍梨も、その名の通り長生きすることであらう。

竈門山という所もあるということですから、

⑰ 阿闍梨のことを思いやっている私の心を知るなら、竈門山も遠い宋への海路を明かるく照りわたしてくれることだらう。

人々が、「今ごろは津の国という所までおいでになつたことでしょう」と言うので、

⑱ 芦の間を漕いで行く阿闍梨の船が、芦にもさわらずに漕ぎ出たと聞くと、なぜ芦が邪魔して阿闍梨の船をとめてくれなかつたのかと、難波の浦が怨めしく思われる。

天を見ると、一面に青く見えるので、

⑲ かの岸を思ひやりてぞあを(本に心えずと)あり本マ、(このかたをながむる(この歌、原本に脱字となつており、歌意不明)三四日して、「今は備前の児島あたりかもしれせんよ」と人々が言うので、

㉑ その児島の方に漕いで行く船が私であつたなら、あれは恋しい子という名を持つ島だと、せめてもの慰めにすることだらうに。

「必ず帰つて来ます。それまで生きていて下さい」と言われたこ

ろう。とされ、それに
川と聞くこの歌は、
次の「かなしみの涙の
川」の歌をみてよんだ
ものと思われるので、
本文の歌の順序に乱れ
があると思われ、おり
川、うかぶ、おり立つ
せき、は縁語。
おりたつ身成尋阿闍
梨のことをさす。
天王寺別当宮の阿闍梨
山岸徳平氏、宮田氏
藤田氏は三条天皇の
皇子敦賢親王の子、増
賢であらうと解され
るが、島津氏は一増賢
は永久四年(一一二六)
別当に任ぜられたので
あり、かつ「寺門伝記
補録」卷十六の伝によ
れば、元永元年(一一一
八)五月逝去四十九
であつて逆算するに、
この延久四年には五才
であり不適当である。
とされ、「延久」のこ
ろ、天王寺別当であつ
た永覚阿闍梨をいうの
であらう。永覚は、教
道親王を父とし、和泉
式部を母として、岩倉
大雲寺にて出家された
ことは、『和泉式部正
集』卷三によつて知り
得る。と解しておられ
る。妥当と思われるの
で、これに従う。
②④の歌を含む部
分には順序に前後の乱
れがあると考えられる
ので、通釈では本来の
順と考へられるごとく
訂正する。
ときは「こいはの約
永久に変わぬこと。絶
えず、常に」の意。こ
こでは「常磐」と掛け
て、松風の「松」と縁

④1 かりにてもみるめなきさのつらければしほりわびぬる蟹の袖かな

この宮阿闍梨の文見はべるにも、

④2 川と聞く涙にうかぶ悲しさにおり立つ身をばせきぞかわつる

とぞ覚えはべる。天王寺別当宮の阿闍梨、この阿闍梨のみもとに

あはれなることも書きて、はしがきに、

④3 かなしみの涙の川にうかぶかな流れあはばやのりの海にて

かへし、

④4 悲しみの涙をよする法の海のひとつ岸をば住みもはなれじ

この仁和寺の松風、ときはにのみ吹きて、いとど物あはれにのみぞ。

④5 別れ路の心や空にかよふらん人まつ風の絶えず吹くかな

と独りごちて日ごろになるにも、物のみ悲しう、死なましかばとのみ。

④6 命だに心にかなふ身なりせば遠ざかりゆく日かず経ましや

ほど経るままに、夢をあしう見たる心地のみして、ただうつとも覚え。なべての世さへくれふたがりたる心地して、すぎに

しかたのみ恋しう。近かりし折も、ことにかるがるしくもてなし

聞えず、ならひはべらざりしかど、面影に向ひる給へる心地し

て、涙のみくれふたがりたる目に、ことごとみ見え、ただとく

死なせ給へと、仏のみ念じ奉るほどに、律師おはして、向ひる給

へるほどぞ、少し慰むる心地して、もののたまふいらへなど聞ゆ

る。「何か、物なおほしそ。ただ阿弥陀ぼとけをよく念じ奉りお

はせ」といひおきておはするほどに、入り日さしたり。「極楽願

ふ」とありし、思ひいでられて、

とばが思い出されて、

④7 たとえ飯の別れであつても、あうことのできないのがつらいので、私はまるで蟹の袖のように涙にぬれて、その袖をしばるのに困っています。

天王寺の別当の宮の阿闍梨が、成尋阿闍梨のもとへ、ねんごろなことをいろいろと書き連ねて、その片端に次の歌が書き添えてあった。

④8 私は別れの悲しさに涙の川に浮んでいます、この涙の川を

流れ下つて、将来、法の海であなたいに会いたいものです。

④9 悲しみの涙の流れをよせる法の海の、その救いの彼岸を、あ

なたも私も、ともに離れることはありませんまい。

④10 この宮阿闍梨の御文を拝見しますにつけても、

宮阿闍梨のお言葉に涙の川と聞く、その涙の川に浮かぶ私は、

あまりの悲しさに、宋に立つ人さえせきとめかねています。

④11 この仁和寺の松風は絶え間なく吹いて、ひとしお哀れに感じら

れる。

④12 別れを悲しむ私の心が空に通ずるのであらうか、人を待つと

いう名のあの松風が絶え間なく吹くことよ。

④13 とひとりごとを言つて、何日かたつても、すべて悲しいばかりで、

いっそ死んでしまつたらばと、そんなことばかりを考へて。

④14 もしも生命が自分の自由になるものなら、子供と別れて悲し

い日日を重ねるようなことをしようか。

④15 日がたつにつれて、悪い夢を見たような気がかりして、全然現

実とも思われない。世の中全体が暗がり塞がったような気がし

て、過ぎ去つた昔のことばかりが恋しく、阿闍梨が身近にいた頃

も、特別軽々しくお扱いもせず、馴れ馴れしくもしなかったの

であるが、今は阿闍梨が幻となつて対座しておられるような気がし

て、涙で曇っている眼には、他の何物も見えず、ただもう早く死

なせて下さい」と、仏にばかり念じ奉っている所へ、律師が来ら

れて、対座しておいでになる間だけは、幾分心の慰められるよう

な気持がして、律師のおっしゃることに御返事なども申し上げ

る。「何も御心配なさいませう、ただ一心に阿弥陀仏を念じ申し

語とした。
人まつ風の―「松」と
「待つ」とを掛けた。
これをきし―「いひお
きし」の誤か。
うらみては―「うらに
「恨」と「浦」を掛く
とし―「思し」と「葦」
とをかける。
阿弥陀仏は（宮）―阿
弥陀仏（冷）
九品蓮台―極楽浄土の
蓮の台。九品とは、極
楽にあるといわれる九
つの階級で、上品上生
上品中生・上品下生・
中品上生・中品中生・
中品下生・下品上生・
下品中生・下品下生・
の九品に分れる。ここ
では単に極楽をさす。
蓮台とは、極楽にある
という蓮華の座。極楽
往生する人はその上に
生まれるという。
思ひやる―この歌、統
後撰集十九巻旅に②の
一消えかへり露のいの
ちはながらへて涙の玉
ぞとどめわびぬる」と
いう歌の次に、「同じ
時かの母の許に遣しけ
る、よみ人知らず」と
題して入る。また、
万代集十七巻四にも、
「成尋唐土に渡りにけ
る頃、母の許にいひ遣
しける、よみ人知ら
ず」と題して入る。
いけ―「生け」に「池」
を掛ける。「水底」「沈
み」は縁語。
まで―「まうで」（詣で）
の。「う」の略されたもの。
「来」―「至る」の謙
譲語。帰つて来て。
きぬべし―きに「来」
と「着」を掛ける。
唐衣―衣の縁語から、
着る、裁つ、反す、裾

- ②⑦ もろともに尋ね見よかしいれをきし仏の道は変らじものを
②⑧ うらみてはあしといふなる難波漏涙ぞ袖はつつみわびぬる
日ごろになるにも、心地の弱く苦しくなりて、さは今は、いひ
おき給ひし阿弥陀仏は、九品蓮台に迎へ給へ、そこにてだにかな
らず対面せん、と思ひなりはべりにき。恋しく覚え給ふこそわり
なく、片思ひに、あはれにはべるにも、世に人多かれど、かかる
人の心やほと、んかしよ知らまほしく。
②⑨ 人のもとよりのたまへる。
②⑩ 思ひやる心のうちの悲しさをあはれいかにといはぬ日ぞなき
かへし、
②⑪ いけらじと水底にこそ沈みたれいひやることもなき涙かな
阿闍梨の、「かならずまで来て、うせなば、跡なりと見ん」と
ありし、思ひいでられて、
②⑫ きぬべしと頼めしかども唐衣たちかへるまで経べきわが身か
と覚ゆるほどに、松風のおと聞ゆれば、
②⑬ 別れ路をなげく心に松風の吹きおどろかすおとぞ聞ゆる
②⑭ うらみわび涙絶えせぬ藻塩草かきあつめてもしほたれぞます
②⑮ 涙川なくなくなりて絶えぬともながれけりとはあとにきて見よ
はるばると人はいくとも我はなきわかれなりせば歎かましやは
②⑯ 山のかたに驚のなけば、
②⑰ 常磐山こずあを頼む驚のつらきねに鳴くはなにもあるかな

- ておいでなさい。」と慰めてお帰りになる折しも、ちょうど入日
がさした。「極楽でお目にかかりましょう。」と言っておられた阿
闍梨の言葉が思い出されて、
②⑱ 言いおかれた仏の道は変らないでしょうから、もろともに必
ず極楽で尋ね会つてみたいものです。
②⑲ 阿闍梨を恨むのはよくないことですが、それでも悲しみの涙
は袖に包みきることができません。
その後、日数がたつにつけても、気持が弱く苦しくなつて、も
う今は、阿闍梨が前に言い置かれた阿弥陀仏様が、私を極楽浄土
の蓮台の上にお迎え下さい、せめてそこででも、阿闍梨に対面し
たいと思うようにさなつてしまつた。阿闍梨のことが恋しく思
われるのがたまらなく、片想いで、なつかしいにつけても、世の
中に人は多いが、私のような苦しい思いをしている人がまたとあ
ろうかと、前世のことまでが知りたいような気さえて……。
ある人のところから言つてよこされた。
②⑳ 阿闍梨のことを思いやつておられるあなたの御心中の悲しさ
を、ああどんなだろうと、御同情申し上げない日とてありま
せん。
それに対する返事。
㉑ もう生きてはいまいと歎きの底に沈んでいますので、御返事
申し上げる言葉もなく、涙におぼれております。
阿闍梨が以前に、「必ず帰つて来てお目にかかります。もし亡
くなられたなら、跡を用いましょう」と言われた言葉が思い出さ
れて、
㉒ 必ず帰つて来るからと、私に期待させているけれども、阿闍梨
が帰つて来るまで生き永らえられる自分であらうか。
㉓ 思っている時に、松風の音が聞えたので、
㉔ 別れを悲しんでいるところへ、人を守つという名の松風の音
が聞こえて、いっそう私の心はかき乱される。
㉕ 阿闍梨のことをうらみ悲しんで、涙の絶え間のない気持を書
き集めてみても、涙はいっそう増すばかりである。
㉖ 私は泣く泣く死んでしまつても、阿闍梨は私の死後帰つて来
て、私が生前泣いていたことを知つてほしいものだ。
㉗ はるばると遠い宋土に阿闍梨が立出するのだとしても、自分

袖など、種々の語にか
かる枕詞。
たち「立ち」と「裁
ち」とを掛ける。
きぬ、唐衣、たち、は
縁語。
松風の「松」に「待
つ」を掛ける。
かきあつめ「掻き」
と「書き」を掛ける。
なくなく「泣く」と
「亡く」とを掛けた。
川とながれ、なくと絶
えぬ、ともに縁語。
なかれ「流れ」と
「泣かれ」とを掛ける。
こすあ「梢」と「子
と」を掛けた。
はなにも「はるにも」
の誤か。
筑紫の船に「筑紫行の
舟」に。
わが袖に「この歌、新
統古今集九離別に「成
尋法師唐土にまかり渡
るとて、今日なむ舟出
し侍と書きおきける
文を、筑紫より日頃過
ぎて京にも至りけれ
ば、成尋母」と題して
入る。
あひ見んと「この歌、
新統古今集九離別の、
前の歌と同じ題で同じ
所に入っている。
このもと「木」と
「子」とを掛ける。
はつか「わすか。いさ
さか。かすか。
すみ」に「炭」
を掛く。「炭」と「お
き」(火の)は縁語。
おきは「置き」と「懐
の掛詞。
まつ「松」と「待つ」
を掛ける。炭を焼く煙
の消えることを、岩倉
からの消息の絶えたこ
とにかけて言った。
御方「成尋をさす。

「備前より」とて、文持て来たる。いとおぼつかなく覚ゆるに、いそぎ見れば、「今日なん筑紫の船に乗りぬる」とあり。目ごろ風のおとも荒らかにすれば、いかがとのみ耳立てて聞かれつるに、むげに遠ざかりておはしぬるにこそと、いどこの空目せられて、珍らしげなき涙こぼれまさるにも、

③⑦ わが袖にかかる涙をとどめおきて船はのどかに漕ぎやゆくらむとぞ思ひやらるる。

③⑧ あひ見んと思ふ心は深けれどわれや泣く泣く待たずなりなんと思ふ思ふ端のかた見いだしたれば、桜いみじく咲きたれば、岩倉の桜思ひやられて、覚えしかぎりいひやられし。

③⑨ 山桜思ひこそやれこのもとにちりぢりになる春は憂けれどかへし

④① 山桜ちりぢりになるあはれなり残れる枝の頼みなければ

岩倉よりおとづる人もなきに、いとど残りはつかに絶えぬる心地して、

④① 奥山にすみおきたりしかひもなくまつけぶりの跡ぞ絶えたる弥生五日、夜の夢に、御方例ならずおはすと見えしかば、何ごとにかと、いとおぼつかなく、人知れぬ命はいとどつすれど、かへすがへすおぼつかなくのみぞ。心地いとあしく、なほ暫しえながらふまじきにやと覚ゆれど、帰りおはしたらんを見たらん時、いかならんとぞ覚えて、何ごとか譬へて慰めんとのみ。

がすでにこの世にない、死別の上での別れであつたら、こんなに歎くことはないであらうに。

山の方で鶯が鳴いたので、

③⑨ 山の梢をより所とする鶯のように、ひたすら子供を頼りにする自分は、今年の春はその子に別れて、せつなく声をあげて泣いていることだ。

「備前から」といって、文を持って来た。阿闍梨のことがたいそう気がかりに思われていたので急いで見ると、「今日筑紫へ行く船に乗りました」と書いてある。このごろは、風の音があらあらしくすると、阿闍梨はどうしておられるかと心配で、きき耳立てて風の音を注意して聞いていたのだが、今はもうすっかり遠ざかつて行ってしまったのだと、いままでよりもいっそう心がうつろになって、珍らしくもないいつもの涙が、よけい流れるにつけても、

③⑦ 悲しがつて泣いている私をあとに残して、阿闍梨の船はのどやかに海を漕ぎ渡って行くのであらうか。

③⑨ また会いたいと思う心は深いけれども、私は泣き泣き過して、阿闍梨の帰りを待たずに死んでしまうことであらう。

と思ひ思い軒端の方を眺めると、桜がたいそう美しく咲いていたので、岩倉の桜が思い出されて、心に浮んだことをすべて岩倉の方に言つてやった。

③⑨ 木の下に花が散り散りになるように親子散り散りに別れる春は辛い、僅かにあの岩倉の山桜を思いやつて慰めている。岩倉の人からの返歌、

④① 山桜が散るようになり散り散りに別れるのは、お母さんにとってこの上もなく悲しいことでしょうが、私たちにとつても、阿闍梨に別れて、頼む人もなく悲しいことです。

岩倉から尋ねて来る人もないので、僅かに残った縁故も絶えはてしてしまつたような気がして、

④① 先日また岩倉の奥山に住んでいたなじみ甲斐もなく、炭を焼く松の煙の消えるように、待つてゐる岩倉の便りも絶えてしまつた。

三月五日の夜の夢に、阿闍梨が御病氣でおいでになると見えた

「御房」の誤か。いとどつすれど——「誤い」とどつすれど——「誤い」か。大そうつらいが、かりこま山——栗子山。山城国久世郡にある。更級日記には栗駒山とあり。「帰り来」の意をこめてある。掛詞。ははの森——山城国相楽郡祝園村にあり、柞木の子の葉の散ることを母が死ぬことにかけて言ったもの。うらみわび——「恨み」に「浦」を掛ける。「尼」をあま——「蟹」に「尼」を掛ける。「波」の意を掛けた。「波」の意を掛けた。いづら浮木の枝にあふべき——盲亀が浮木にあつて救われるごとく、成尋に会うことのできるのはいつどこであるうか、との意で、逢いがたい譬として法華經に出てくる盲亀浮木のことをよんだもの。蟹小舟——「尼」を掛ける。のり——「法」と「海苔」とを掛けた。かた——「方」と「渦」とを掛ける。みるめ——「見る目」と「海松布」の意を含む。うらみ——「恨み」と「浦」を掛ける。朝日待つ露——人の命のはかなきことを譬えている。羊の歩み——屠殺所に引かれる羊の歩みのように遅いことに譬える。摩訶摩耶經上に「如麻陀羅驅羊就屠所、歩々

- ④② ゆきかへりかりこま山を待つほどにははその森は散りや果てなん
④③ しきしまや山はたのみもあるものを露ふり捨つる小笹原かな
④④ うらみわびあまも涙に沈むかないづら浮木の枝にあふべき
心の乱れて、念仏もかずおこたる心地すれば、
④⑤ 蟹小舟のりとるかたも忘れぬみるめ渚のうらみするまに
よさり苦しうて、うち臥したれど、ねられねば、
④⑥ 阿弥陀ぶの絶間苦しき尼はただいを安くこそねられざりけれ
④⑦ 朝日待つ露につけてもわすられず契りおきてし言の葉なれば
④⑧ 歎きつつはかなうすぐる日かずかなこれや羊の歩みなるらん
独りごつにても、涙の玉の、やがて袖にかかれば、
④⑨ 袖の浦に涙のたまは走りつつあらはるれども知る人もなし
⑤① しひとむるこの世にまたもあひ見ずば魂かけるとも誰か告ぐべき
いふべきかたもなくぞ。
○ 阿弥陀仏と 思ひてゆけば 涼しくて すみわたるなる
底よりぞ 九品にて はちす葉を おひのほかなる 上葉
こそ 露のわが身をおきてんと 思ふ心し 深ければ こ
の世につらき ことも歎かぬ

- ので、何事かといふ心配に思われ、寿命は人の力ではどうにもならないことで、たいそうつらいことではあるが、それでも阿闍梨のことがかえすがえすも不安に思われる。気分がたいそう悪く、もうしばらくも生き永らえることはできないと思われるが、もし阿闍梨が帰って来られたのを見た時は、どんなにか嬉しかろうと思われ、この気持を何にたえて慰めようかとばかり思う。
④② 阿闍梨の帰って来るのを待っている間に、母の命はつきはてしてしまうことでしょう。
④③ 日本には頼りにしている母もいるのに、その母を振りすてて阿闍梨は宋に渡ってしまったことだ。
④④ 蟹も浦を見失って沈めば、いったいどこに浮木の枝を見つけて浮かばれよう。尼の私も阿闍梨をうらんでこんなにも涙に沈んでいる。いつどこに再会の折を得て浮かばれよう。とても救われはしない。
④⑤ 心が乱れて、念仏を唱える数も怠り勝ちのような心地がするの
みるめない渚の浦を見物している間に、蟹小舟はのりとする術も忘れてしまった。そのように、阿闍梨に再会できないことをうらんでいる間に、私は念仏修業の道も忘れてしまった。その夜、苦しくて横になったが、眠られないので、
④⑥ 南無阿弥陀仏の仏号をとる念仏も絶え間勝ちで、苦しくて私は安眠できない。
④⑦ 朝日待って消える露のようにはない身だが、それにつけても必ず帰って来ると約束した阿闍梨のことが忘れられない。歎き歎いてわけもなく日かずは過ぎてゆく。こうして一歩一歩死地に近づいてゆくのであろうか。
独りごとを言うにつけても、涙が玉のように流れて袖にかかるので、
④⑨ 別れの悲しさに、涙の玉は袖の裏をはっきりと走り流れているのだが、この悲しさを知ってくれる人は誰もいない。
⑤① 強いて生き永らえているこの世で、もし阿闍梨に再会できずに死んだなら、私の魂が天翔っていても、誰もそれを阿闍梨に告げてくれる人はいないであらう。
言いやうもない心の内である。

近死地、人命疾於是」とあり。
玉のやがて(宮)——玉の浦に羽前国西田川郡にあり。浦に「裏」を掛ける。着物の裏にある玉が人目につかないことは法華經に出ており、それを歌枕の袖にかけ、人知れずこぼれ出る涙に譬えたもの。
九品にてはちす業を——九品蓮台の上品に極樂往生したいの意。
おひのほかなる(宮)——おひのほかなる(宮)あひ見し——あひ見んの誤か。
本ママう落敷
おとすやに(宮)——おとすやに(冷)おとすやうに。「う」を略した表記。
消えかへり——この歌、続後撰集十九巻旅に「成尋法師入唐の時母のよめる」と題して入る。消え、露、涙、玉、歎きつ——この歌、新勅撰集十七巻二に「成尋宋朝に渡り侍りけるを歎きてよみ侍りける、成尋法師母」と題して入る。
世の憂きを——「世の憂きも」の誤か。
息の絶ゆるおそまつ——呼子鳥——子を呼ぶ鳥の意。郭公の異名。
たそかれ時——誰かと尋ねる時。それを黄昏の意にかけた。
いつつきに——五カ月にいつつきにすべき——いつつきにすべきの誤で「いつつきすべき」を

⑤1 契りおきし蓮^{はちす}の上の露にのみあひ見しことをかぎりつるかな
涙の、玉をぬきおとすやにこぼれおつれば、
(本ママう落敷)

⑤2 消えかへり露のいのちはながらへて涙の玉ぞとどめわびぬる
など独りごつにも、誰かは知る人もなくてぞ。

⑤3 歎きつわが身はなきになり果てぬ今はこの世を忘れにしがな

⑤4 世の憂きをつらきも知らでやみねかしあるにもあらずなりぬとならば

⑤5 わが魂はゆくへも知らずなりにけり我かかたとどらるるまで

⑤6 歎くにもいふにもかひのなき身には出で入る息の絶ゆるおそ待つ

⑤7 呼子鳥身に添ふ影に聞えねどなぞやなぞやといはれこそすれ

歎き暮したる夕暮、常よりも面影に覚え給へば、物おぼえぬ心地に、おはしたる心地して、

⑤8 恋ひわたる夕暮がたの面影をたそかれ時といふにやあるらん

尽きせず物のみ覚ゆるに、人のおはしまして、「いつつきになりにけり」といふを聞くに、

○ 南無阿弥陀仏を常に念じていれば、心もさわやかになって、極樂の九品浄土で、生えのぼる蓮の上葉を、はかないこの身を置く所にしようと思う心が深く、またそれが必ず可能だと信ずることができるので、私はこの世のつらさも少しも歎きはない。

⑤1 約束した通り、私は極樂の蓮の上に阿闍梨と生まれ合うことばかりをあてにしている。

⑤2 涙が、糸に貫いた玉をちらばすようにこぼれ落ちるので、正体もないような有様ながら、はかない露の命は永らえて、涙の玉をせきとめかねている。

などと独りごとを言ってみても、誰も知ってくれる人はいない。

⑤3 歎き歎いて私は死んだも同然の身の上になってしまった。この上は、いつそこの世のこともすべて忘れてしまいたい。

⑤4 正体もない有様になってしまったというのなら、いつそこの世の憂きもつらさも感じないで終ってしまいたいものだ。

⑤5 自分やら他人やら分らないまでに、自分の心はほんやり落着き場所を失い、行く方もわからなくなってしまった。

⑤6 この苦しみを歎こうにも言おうにも今更かいのない私には、ただ出入りする息の絶えて死ぬのを待つことがあるばかりである。

⑤7 人をあの世に誘うという呼子鳥の声は、近くに聞えるはずはないが、それでもつい、なぜ早く私を呼んでくれないのかと、うらみの言葉が口をついて出てしまう。

⑤8 歎き暮した夕暮に、いつもより阿闍梨の姿が目先にちらついて正体もないような気持でいる私には、それがまるで阿闍梨が帰って来られた姿のように思われて、

⑤9 あまりに恋い慕っていたので、夕暮方に阿闍梨の姿が見えた。それで夕暮方のことを誰そ彼時(そこにいるのは誰かと尋ねる時)というのであろうか。

絶えず阿闍梨のことばかりを思い続けていると、ある人がおいでになり、「あれからもう五カ月になりますね。」とおっしゃるのを知り、

⑤9 別れてから何とはなく過ぎる月日か、いつ尽きるとも知れない涙であるのに、もう五カ月も経ってしまった。

い、給ひけんたびの、釈迦の出家された折の、
藤田氏は、この下
に脱文があるうと推定
されているが、その段に
は、なくとも、このす
体に見わたつて文章に乱
著の見えることが、頗
阿闍梨に語りかけた急
まりの乱れであらう。
二人、律師と阿闍梨。
この人、成尋阿闍梨。
釈迦とけい摩耶夫人

釈迦ぼとけ、摩耶夫人と申しける、生みおきてうせ給ひにけれ

こんなことは書きつけないでもよいことだが、もし帰って来られたならば、母が生前こんなことを考えていたのだと見てくたさい。昔、お釈迦様が世をいとうて出家なされた折のことを、あなたが入宋のことを言い出された折に言いたかったのですが、その時は、私は気分がたいそう悪く、息苦しくて物も言いにくかったので、申し上げることができずにしまいました。あの折、人々がたいそう悲しんで、泣きながら「一旦別れたら、再会は不可能です。」と言ったのですが、私は、長年あなたと心も全く理解し合ひ、あなたの心に反対したこともなく、思うままにおさせしたはずですが、あなたは、私が余りにも長命に過ぎたため、母の死後思う通りにしようと思っていらっしゃったことを、それまで待つことができないで、とうとう言い出されたのですが、私はそれまで生き永らえて、あなたの修業の邪魔をすると思われたくないばかりに、つらさをもこらえて黙って過したのですが、しかし、今でも私の余命も今日明日のうちに迫ってしまいました。何としも一目なりとあなたのお顔を見て死にたい。長年の間、私は、臨終の折には律師とあなたと二人並んでおられて、尊いお話や、念仏を唱えて下さるのを聞きながら死んでゆきたいと願っていたのです。しかしそれも、あなたがこのような入宋の志を持っておられるのに合ったのは、やはり前世からの宿縁で、私の晩年は運が悪かったのだと、かえすがえすも思い諦めて、あなたには何もお話しなかったのです。

12

が四月八日に離宮藍毘尼の無憂樹の下で釈迦を生み、産後七日で殺したために、その妹波闍波提が養つた。それには「浄飯王」の誤りにも「一人も」の誤り。障子に背中をあてて百日までぞ。乳母にはあづけはべりし。起きかへりの程に。その志今まで怠らず。この部分で、藤田氏は「障子に背中をあてて、百日までぞ乳母にはあづけはべりし。起きかへりの程に。その志今まで怠らず。」と、その志今まで怠らず、外に居給ひし後、島津氏は「さうしにせ中をあてゝもかまつはへりし。おきかへりのほに、そのこゝろさし、いまておこたらす」として、両氏とも「あづけはべりし」を「あづけずとされておの誤脱か」とされておる。共に「起き返りの程に、その志今まで怠らず」を統けて解しておられるが、宮田氏は本文のごとく解しておられ、妥当と思われる。かかる心に入宋の志太子「悉多太子」すなわち釈迦。四面の門「太子が王城の四方の門で、生老病死の四相を見て、出家入山の志を起したという事実。生るる」「むるる、生れる」「むに」「ん」を当てた。うまる。ものお見しとて「ものを見しとて」の誤。よひいでて（宮）――よ

ば、父浄飯王と申す、独り養ひて、生ひ立て給ひたるところは聞きはべれ。それは、国を譲り世を伝へ給へとおぼす志こそはべりけめ。高きも賤しきも、母の子を思ふ志は、父には異なるものなり。腹の内にて、身の苦しう、起き臥しも安うせねど、わが身よくあらんと覚えす。これを、見る目より始めて、人よりよくてあれかしと思ひ念じて、生るる折の苦しきも、物やは覚ゆる。生れいでたるを見るより、人のこれを憐れび思はずば、物になるべき人のさまやはしたる。その中にも、はかなかりけるにか、この阿蘭梨のいみじう悲しかりしかば、わが心の苦しきも知らず、これをまづ人にもわれも扱ふほどに、人にいだかすれば泣き、われいだけば泣きやみ給ふを、しばしも泣かせじと覚えつつ試みれど、なほほかにては泣く。わがもとにては泣かず。おましなどに臥すれば泣くに、夜もうしろめたくて、膝に臥せて、高坏を燈台にして、膝の前にもとして、障子に背中をあてて百日までぞ。乳母にはあづけはべりし、起きかへりの程に。その志今まで怠らず。

ほかに給ひしうち、人のくれば、何事をかいはんずらんとのみおぼつかなく、おん文見ぬほどは、いかかと覚えはべりつるに、この三四年は、近くては、夜も夜中も、おぼつかなく聞きはして、嬉しう侍りつるに、かかる心の深くつきて、今まではべる命のはべるうとましさに、われながらうとましく、人にも見ゆる、いと恥かしうはべりて。それに、昔、太子、花園に遊び、出で給ふには、四面の門に、んまるるものお見しとて、帰て今一つの門におはするに、老いてゆゆしげなるものを見る。また帰りて、次のに病ひするものを見て帰り、次のに死ぬる見て、

たので、父の浄飯王と申し上げるお方が、男手一つで養いお育てになったのだと聞いております。それには、お釈迦様に国を譲り、世を継いでいただきたいというお心があつてのこととごいましょう。しかし、身分の高下を問はず、母が子を思う心は、おのずと父とは異なるもののようなのです。子が胎内にいて、からだの苦しく、起き臥しも安らかでなくても、自分が安楽でありたいとは思わず、子供のことを、容貌をはじめとして、何事も人並以上であつてくれと願ひ、生まれる時の苦しきなども何とも思わぬ。子供は、生まれるなり人がこれを憐れみいつくしまなければ、決して一人前に育つものではありません。なかでもあなたは、後にこのように縁が薄くなるというようなこともあつてか、ひどくいとしく思われ、自分の苦痛をかえりみず、人にも世話をさせ、自分でも世話をしたのですが、人に抱かせると泣き、私が抱くと泣きやまれるので、少しの間も泣かせまいと、いろいろに工夫してみましたが、やはりよそでは泣き、私のところでは泣かないのです。蒲団の上などにねかせると泣くので、夜も心配で、膝の上にねかせ、高坏を燈台にして、膝の前にもとし、襖に背中をあてて、百日まで育てました。そして起き返りのできる頃になってやつと乳母に預けたのです。その気持は今でも変わりありません。あなたがよそに移られて後は、人が来れば、何かあなたの身の上に変化があつたことを告げに来たのではないかと心配し、あなたのお手紙を見るまでは、どんな御様子でお過しかと気づかわれたのですが、この三四年は、共に岩倉に近く住んで、夜でも夜中でも自由におとずれ合うことができ、安否を気づかうこともなくて、嬉しく思つていたのですが、そのあなたに、今になってこのように入宋についての深いお志のあることを知るとは、私にとつては今まで生き永らえて来たことが情なく感ぜられるばかりで、われとわが身がうとましく、人に合うのも恥かしく思われます。昔、悉多太子は、宮殿の花園にお遊びになり、王城を出ようとなさる時、四方の門のうちの一つで、生まれる者の姿を見たといつて引き返され、もう一つの門においでになつて、老いて醜い様子をした者を御覧になり、またお引き返しになり、次の門で、病氣をしている者を見て引き返し、更に次の門で、人の死んでいるのを見てお引き返しになり、とうとう夜になるのを待つて王城を出

延久三年正月廿日 二卷

延久三年正月廿日 二卷

延久三年正月廿日——廿日同は岩倉を出て、仁和寺に移った日の記事。仁和寺の御修法に参らるるに、仁和寺の母の居所は、人ばなれしていて気がかりだ」というので、毎晩、宿直のために人をおよこしになったのですが、「京から来るのは、遠くて気の毒だ」などと人々がいつて、私にも京から来ることをすすめ、律師も、「では京に出ておいでなさい」とおっしゃる。大そう出にくく思ったけれども、出ることにすると、車にも人が抱え乗せてくれ、私は直垂を敷いて横になっていたのでした。

岩倉を出て、仁和寺へ渡りし折のことは、みな書きとどめてはべれど、なほ飽かず覚えて。その車に乗りけむほどを思ひいつるに、つぶと覚え。いかばかり絶え入りたるにか。死ぬる人の功徳人は、仏ゆめにみえ給ふなり。罪人は、怖ろしげなるものなど見え、怖ろしきさま覺ゆらんなど、打ち返し思ふに、車よりかきおろして、臥ししより、起きあがる時なくて過ぐす程に、四月より、律師の御房、内の御修法参り給ふに、仁和寺の居所、人離れておぼつかなしとて、夜々は、宿直に人おこせ給ふを、京より来んには、いとほしなど人々いひて、そのかして、律師も、さば出でよとのたまふ。いと出でにくく思へど、出づるに、車にも人のかき乗せて、直垂を敷きて、臥してぞはべりし。

我にもあらず、はかなくて日かず過ぎて、六月になりて、^{わろはや}瘧病のやなる心地起りて、日まぜに消え入るやにしつつ煩へば、暑く苦しきほどに、律師おはしかよひ、僧どもの、経読み加持する暑げさを見るに、心地あしきよりも、いとほしきに、からうじておこたり、あるにもあらで、いとど目も霧りたるやうに覚えて過ぐす。

七月になりて、涼しうやなると思へど、なほ暑きに、またありし心地起りて、いと苦しけれど、常に人に言はじ、こたみだにいかで死ななと思ひて、仏をのみ返す返す怨みまほしう、ただ、疾く死なせ給へと念じ奉るに、またおこたりぬ。心憂く長き命かなと思ふ。

岩倉を出て、仁和寺へ移った折のことは、みな（前巻に）書きとめましたが、それでもまだものたりない気がして書き続ける。仁和寺からの迎えの車に乗った時のことを思い出そうとしても、全く記憶がない。どんなに正気を失っていたことか。功徳のある人が死ぬ時には、夢に仏が現われ給うということだが、罪を犯した人は、恐ろしそうな情景が見え、恐ろしい気がするのだらうなどと、くり返し思っているうちに、車から抱えおろされて、寝込んでしまつて起きあがる時なくて過しているうちに、四月から、律師が宮中の御修法に参られることになり、「仁和寺の母の居所は、人ばなれしていて気がかりだ」というので、毎晩、宿直のために人をおよこしになったのですが、「京から来るのは、遠くて気の毒だ」などと人々がいつて、私にも京から来ることをすすめ、律師も、「では京に出ておいでなさい」とおっしゃる。大そう出にくく思ったけれども、出ることにすると、車にも人が抱え乗せてくれ、私は直垂を敷いて横になっていたのでした。

正体もないような状態で、とりとめもなく日数は過ぎて、六月になり、おこりのような病氣にかかつて、一日おきに正気もなくなるように煩つて、熱が出て苦しがつて、と、律師が宮中からお出になり、毎日来られ、僧たちが経を読み、加持する暑そうな様子を見ると、気分が悪いよりも、氣の毒に思われたのであるが、やっと病氣もなおり、生きてゐるといえないような状態で、前よりもいっそう眼も涙にかすむような氣持で過した。

七月になつて、涼しくなるかと思つたが、やはり暑いので、また前の病氣が起つて、大そう苦しいけれども、いつも、この苦しさを誰にも言うまい、今度こそはぜひ死んでしまおうと思ひ、仏ばかりをかえすがえすも怨みたい氣持になつて、ただ、「早く死なせて下さい」と念じ申していたが、またもおつてしまった。情ないほど長い命だなあと思う。